

野城泉



野城泉は浦底漁港へ向かう坂の途中にあり、湧水のまわりを石積で囲んで池のように水を溜めています。周辺に無土器期の浦底遺跡、13～14世紀頃の野城遺跡があります。あふれ出る豊富な湧水は坂を下って浦底海岸まで流れています。

1995(平成7)年に、非常に限られた場所にしか生息しない希少な藻類ミヤコチスジノリが確認されました。



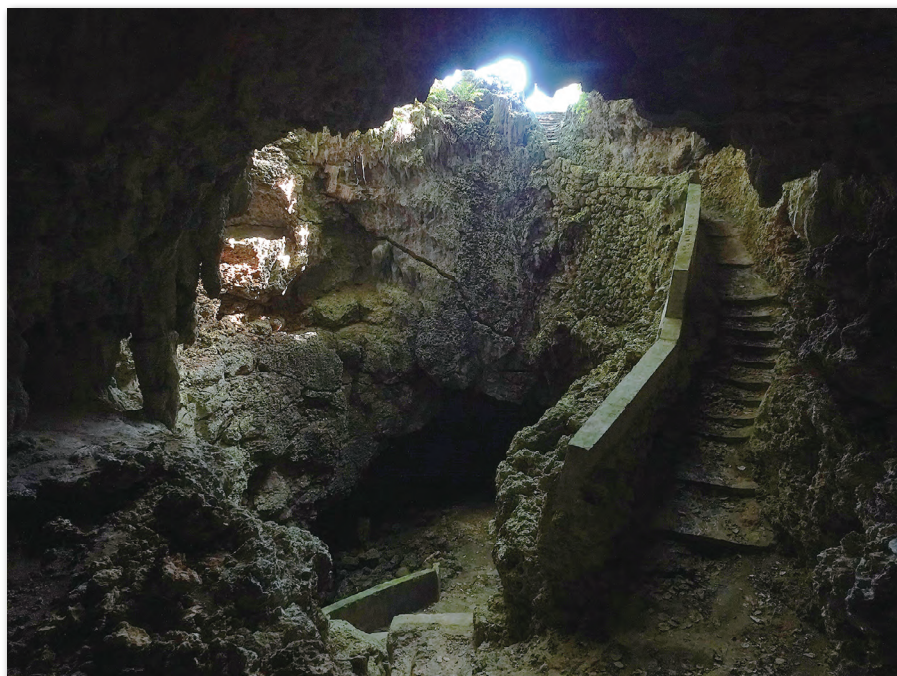
プイキャー



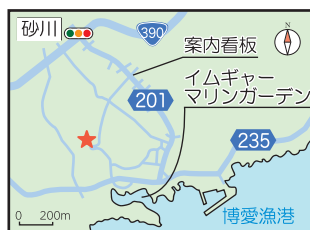
プイキャーは新城海岸へ降りる坂道の途中から左奥に約30m入ったところに大きな溜め池があり、崖側の岩の間から音を立てながら水が湧き流れています。水量が豊富で、湧水からの水は飲用に、2段構造の溜め池は上段が水浴びや洗濯、下段は牛馬の水飼いに使われ、最後は水田の水にも利用されました。湧水の手前左に、崖に沿うようにプイキャー御嶽があります。



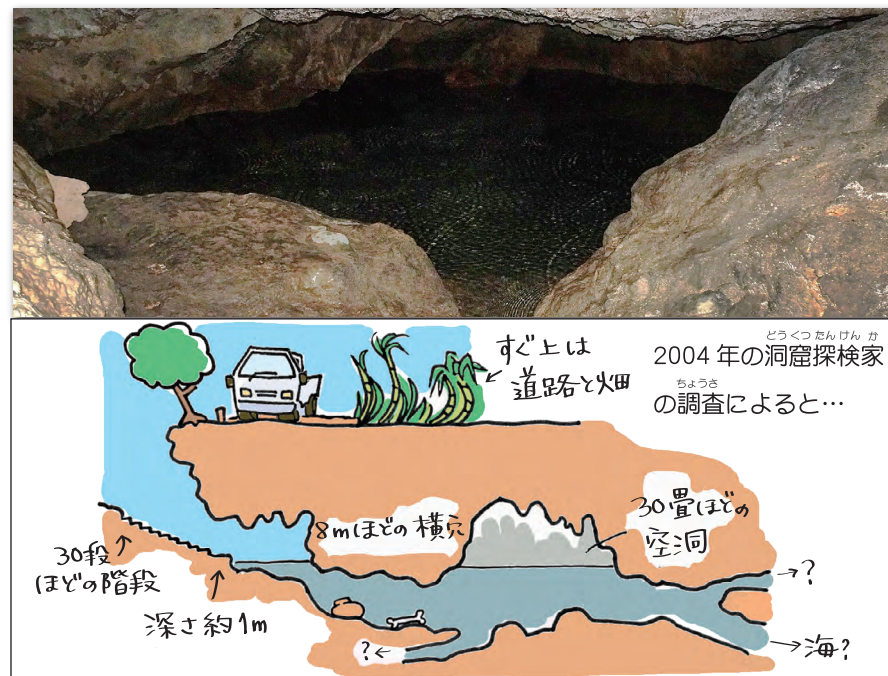
ぐすく ベ ちょう とも り がー
城辺町の友利のあま井



あま井の湧水までの深さは約20mあり、断崖に囲まれた地下空間が広がります。友利元島遺跡西側に位置し、降り井としては規模が大きく水量も豊富です。「雍正旧記(1727)」には掘削年不明と記されていますが、乾隆三十六年大波(1771)の以前から友利、砂川、新里の住民に使われ、現在地に集落が移動した後も、1966年12月までは友利・花切の簡易水道の水源に利用されました。



きん す きゃー がー
金志川泉



金志川泉は金志川豊見親の屋敷跡の西にある降り井です。緩やかな坂の先に開口部があり、さらに30段ほど階段を降りると岩の下に湧水が溜まっています。いつ頃から使われていたかわかりませんが、友利元島遺跡内にあり、あま井とともに集落の形成に深く関わってきたことをうかがわせます。潮の干満によって海水が入り込むため、主に洗濯や水浴びに使われていたようです。



島尻マングローブ林



マングローブは海水と淡水が混ざり合う河口汽水域の塩湿地に生息する植物の総称で、川の無い宮古では湧水から発達するためとても重要とされています。島尻は宮古で最大の群生地、ここを分布の北限とするヒルギダマシをはじめ、ヤエヤマヒルギやオヒルギ、メヒルギを見ることができます。干潟として広く開けていた東側は、いまは繁茂したヤエヤマヒルギなどに覆われています。



湧水めぐりをするときに気をつけること

降り井や湧水、井戸は足元が悪く、転倒や滑落の危険があります。

転倒のキケン



摩擦していたり濡れて滑りやすくなっています。しっかりした靴でゆっくり慎重に。

転落のキケン



囲いなどがなく、深くても水がある井戸や、草に穴が隠れていることも。

崩落、落石のキケン



もろく崩れやすくなっているため、周辺の岩などに手をかけないようにしましょう。

ひとりで行かない



助けを呼んでも周囲に誰もいない場合も。子どもだけでは絶対に行かない。

むやみに立ち入らない



地域のたいせつな祈りの場であったり、そこにしかない動植物がいることも。

飲まない



飲料水として消毒などがされていないので、お腹をこわすキケンがあります。

先人の生活の記憶を伝える遺産です。大切にしましょう。

湧水にくらす生き物たち

宮古の湧水は「地下水環境」と「地表水環境」のふたつの環境があり、基本的には異なる生物が住んでいて、両方にいる種もあります。

地下水域にすむ生き物

地下水域には甲殻類、ヒルミミズ類などがみつかっており、特に多いのがエビ類です。地下の生物は眼が小さく退化する一方、触覚などの感覚器官が発達し、体色は白く赤であるなど、暗い環境に適応したと考えられる特徴があります。

ドウクツヌマエビ



ウリガーテナガエビ



2005年新種登録

エビヤドリミミズ



2003年に発見。ヒル類やミミズ類に近く、ヌマエビ類に付着共生する。宮古島では3か所でしか確認されておらず、ミヤコサワガニ同様、重要な学術的価値を持つ。

地表水域にすむ生き物

ミヤコチスジノリ



淡水性の紅藻類で宮古のものは固有の変種とされる。2か所でしか確認できていない。

チョウチンミドロ



「提灯」みたいな形。生卵巣。造精巣。チスジノリもミドロも、きれいな水で日光がよく当たる環境を好む。

宮古島では2012年にごく一部の湧水などで確認された緑藻類。世界に広く飛び石状に分布する。もともと海の浅瀬に生えていたが、地殻変動で陸に閉じ込められ、淡水化したとされる。

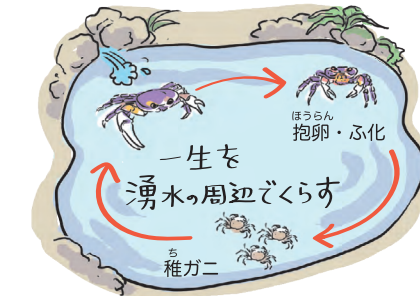
湧水生物の一生

湧水の生物の一生は大きく分けて「通し回遊」と「非通し回遊（純淡水性）」があります。通し回遊はふ化した後に海へ出て、成長してから湧水を遡ります。非通し回遊はミヤコサワガニのように湧水の周辺から一生離れずに暮らします。

通し回遊 海と淡水域を行き来する



非通し回遊 (純淡水性) 一生を湧水の周辺でくらす



ミヤコサワガニ

宮古固有種。1997年に発見され2002年に新種として登録。稚ガニは親と同じ形で孵化する。宮古島の3地域の湧水周辺でのみ確認されている。

淡水生物が宮古のヒミツをにぎる！？

宮古諸島は島の大部分が石灰岩でできているため、過去に何度も海の下に沈み、淡水の生き物は絶滅したと考えられていました。ところが、ミヤコサワガニやエビヤドリミミズ、ミヤコチスジノリやチョウチンミドロは、淡水でしか生きられず、海を渡って他の島に行くことができません。これらの生き物たちは、島の歴史を探る上での「生き証人」ですが、宮古島の数か所の湧水でしか確認されておらず、生息地も含めた保全が求められています。

淡水でしか生きられないミヤコサワガニなどがある



宮古は何度も海中に沈んでいるのは石炭時代のころ

…なぜ？



人々と水 ~鉄・鍛冶の伝来と水~

11世紀後半～16世紀は「グスク時代」と呼ばれ、九州や沖縄など北からの文化が波及し、交易が活発になり、多くの集落ができました。

宮古に鉄と鍛冶が伝来したのは、14世紀中頃とされています。鉄器によって、自然のままで利用していた湧水や洞泉を使いやすく整備したのではないかと考えられています。また、以前は牛馬の骨などで農耕していましたが、鉄の農具の普及によって農作物もたくさんつくられるようになりました。

古謡にみる鉄と井戸

いつ頃から井戸がつくられるようになったか分かっていませんが、狩俣に古くから伝わる神歌「狩俣のニーラアグ」に、鉄器と思われるマイツ(手斧)やブナ(大槌)でクスヌカーを掘る様子がうたわれています。

狩俣のニーラアグ『大城殿』(抜粋)

25.クスヌカ ブラ ダンガソー

(クスヌカーを掘る相談をしよう)

31.マイツ トウス コナエ

(手斧を取って工夫たちは)

32.ブナ トズ コナエ

(大槌を取って工夫たちは)

36.クスヌカーユ プリバ

(クスヌカーを掘ってみると)

40.アマミズ プズ デ

(甘い水が湧き出して)



クスヌカー

『平良市史第7巻 資料編5(民俗・歌謡)』

鍛冶の神さまは渡来人？

宮古には、鍛冶の神さまをまつる御嶽がいくつもあります。

平良西仲宗根の船立御嶽や伊良部池間添の比屋地御嶽は久米島、伊良部の長山御嶽と城辺友利の嶺間御嶽は大和からの渡来人が、鉄や鍛冶の技術をもたらしたという伝承があり、鍛冶や農業の神さまとして祀られています。また、平良狩俣の神歌『頂の磯金のタービ』で、大和から船で運んできた鉄で農具をつくり、島中に広めたことを謡っています。

昔は各村々に鍛冶小屋があり、村人の中から鍛冶役を選んで農具

の修理などを行っていました。その跡地をカッチャーと呼び、鍛冶の神さまを祀っています。旧暦11月8日に「フーツキヨーカ」という鍛冶の神に感謝する祭祀が行われます。フーツキとはふいごの月を意味します。全国にも同様な祭りがあります。

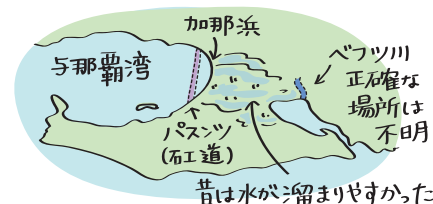


平良西仲宗根の船立御嶽

大規模工事も可能に

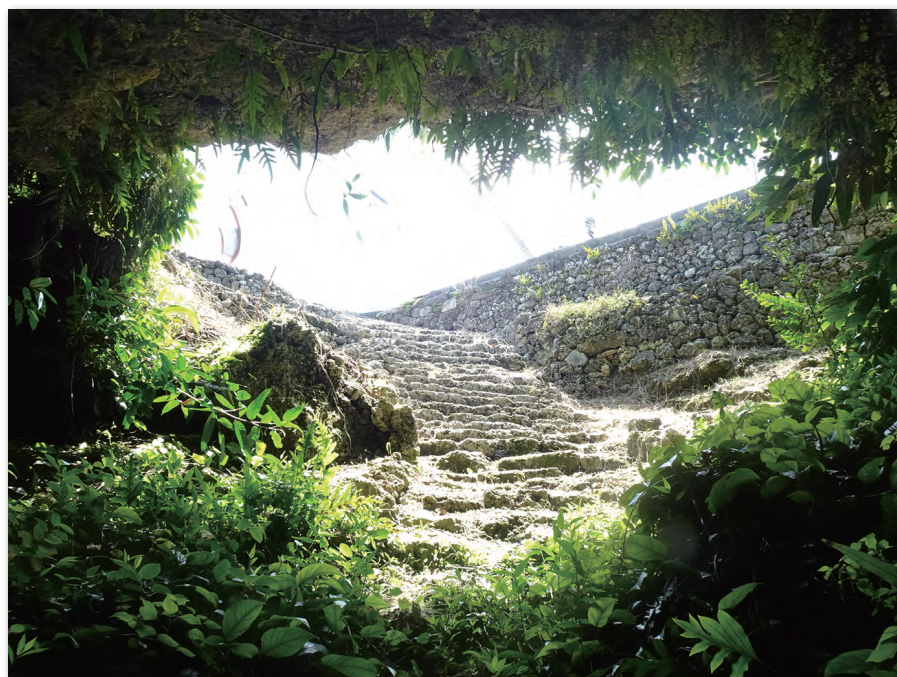
15世紀末頃から16世紀初頭に宮古を統治した仲宗根豊見親は、生活用水を確保するために、平良のスサカガー、城辺のベタラ川、下地のベフツ川を整備させました。また、湿地帯だった加那浜に碇道を建設させるなど、鉄器が伝

来したことでグスク時代は大規模な土木工事が行われ、その結果、石の加工技術も向上したと考えられます。



昔は水が溜まりやすかった

イザガー



イザガーは住宅街の真ん中にある大きな降り井です。106段の石段は途中の踊り場からふたつに分かれて湧水に至ります。人が多いときは右の階段を降り、左側から上がったそうです。戦時中は防空壕にも使われました。1930(昭和5)年に糸洲朝義がイザガーのすぐとなり井戸を掘り、それを水源に宮古で最初の水道を布設しました。現在も地域住民や出身者に大切にされています。



白明川



「雍正旧記(1720)」に「志らか川但洞川」とあり、1692(康熙31)年の大雨で崩れ、1724(雍正2)年に補修されたと記されています。目黒盛豊見親が戦いの後、身を清めていたところ妻となる孟仁似と出会った場所と伝えられています。西側高台には14世紀前期に保里天太が築いた城跡とされる場所もあり、近くの大和井などととも周辺一帯は栄えていたと考えられています。



ミヌズマ遺跡の井戸



ミヌズマ遺跡は久松漁港の南東にあり、11～15世紀前半の集落跡です。井戸は遺跡の北側に位置し、ミヌズマに居住した人々が使っていたと考えられ、周りは石垣で囲んだ広場のようになっており、入口には拝所があります。なだらかな石段を降りると円形状の井戸があり、内側には石積を施しています。地形から以前は洞穴泉だったのではないかと指摘もあります。



人々と水 ～農耕と稲作～

宮古は人頭税の年貢だった粟が主要作物でしたが、平良の白川田や下地の崎田川、城辺の長間田など湧水が豊富な一部の地域では稲を栽培していました。2月頃に苗を植え、5～6月に収穫していたそうです。その後も換金作物として栽培されましたが1950年代末から1960年代にかけサトウキビの生産が盛んになると水田は畑になっていきました。

鉄器のおかげで農耕と稲作が発展



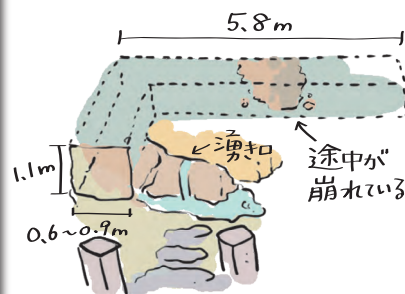
かつて水田だった長間底

無土器期とグスク時代の大きな違いは農耕の有無です。平良久松のミヌズマ遺跡で行われた発掘調査では、13世紀後半～14世紀中頃の粟や麦、米などの農耕穀物が出土しました。それまで宮古島最古の穀物は外間遺跡の16世紀前半～17世紀前半でしたが、300年近く歴史を遡ることになりました。宮古島の歴史にはまだ多くの謎があり、発掘調査による新たな発見が期待されます。



炉跡より検出された植物の種子(13世紀後半～14世紀中頃)

あ ず しゅー がー 按司ぬ主泉



湧き口と横の壕の様子

按司ぬ主泉は城辺比嘉の高腰城跡の北東にあり、海拔100m余の高所にある降り井で、琉球石灰岩と泥岩の不整合面から湧き出ていることがはっきり分かります。干ばつでも長雨でもあまり水量は変わらないそうです。左奥に戦時中に掘った緊急避難のための壕と思われる横穴があります。「按司ぬ主」の名称からグスク時代にあった高腰城を支えた主要な水源と考えられています。



クスヌカー (ツガガー)



クスヌカーは大嶽城跡公園北の石畳を下った先にあります。両側は石垣が積まれ、少雨時でも水量は多く、以前はあふれた水が農地まで流れていたそうです。グスク時代の大嶽按司が掘削したと伝えられ、自衛隊分屯基地内のマイヌカーと対をなすようにクスヌカーと呼ばれていましたが、1926(大正15)年の改修で大きな枡(ツガ)が造られ、ツガガーと言うようになったといいます。

